

追悼 レナータ・スコット

取材・文＝中東生
Text＝Shinobu Naka

世紀の大歌手がまた一人、この世を去った。レナータ・スコットはオペラ界で独特の存在感を放っていた。その歌唱および発声のずば抜けたテクニクは同時代の他の歌手の追隨を許さない完成度で、ファンのみならず、同僚や後輩のオペラ歌手たちからの支持は絶大なものだった。ここではそのスコットの生涯を追い、かつて共に仕事をしたアーティストたちからの追悼の言葉を紹介しよう。

シンデレラ・ストーリー

8月16日、イタリア・オペラ黄金時代の、パズルの最後のピースが天に昇ってしまったような気分になったオペラ・ファンや関係者は多いだろう。彼女は生涯、家族と共に歌に仕えた。だから完璧な創造物としてオペラ界に君臨できたのだ。

4歳のころから歌手になりたいと思いい、バルコニーで歌ったり、お針子だった母親が裁縫仕事をしている間、側で歌ってあげたりしていたという。故郷のサヴォーナで14歳から音楽を学び始め、両親や叔父叔母が受けさせたミラノのテアトロ・ヌオーヴォでのコンクールでヴェルディ《椿姫》のアリアを歌い、主役のヴィオレッタでのデビューを勝ち取ったのが18歳のときである。その後はブッチーニ《蝶々夫人》のタイトルロールのオファーも受け、ミラノ・スカラ座には《ワリー》(カタラーニ)のワルター役を、レナータ・テバルディ(S)、マリオ・デル・モナコ(T)、ピエロ・カプッチルリ(Br)と歌い、デビューした。

厳格な発声技術と自然な臨場感

そんなシンデレラ・ストーリーを、彼女は「間違え」だったと振り返る。若くして、よいテクニクもないままヴィオレッタと蝶々さんという二つの大役を歌ったため、発声に問題が生じ、それに気がついた共演者のアルフレード・クラウス(T)が自分の先生を紹介してくれたのは幸運だった。6カ月の仕事はすべてキャンセルさせられ、この2役もお預けで、勉強し直したのだという。このとき「ベルカントの鑑」の歌唱技術を手に入れたのだ。彼女にはマスタークラス等の弟子だけではなく、ルネ・フレミング(S)やアンナ・ネトレブコ(S)もアドヴァイスを受けていたらしい。厳格な発声技術に反して、スコットの歌には自然な臨場感があるが、徹底した歌詞の学びかたに起因していると思われる。古きよき時代のイタリア人にとって基本的な手法でもあるが、まずは歌詞だけ書かれているリブレットを読み、それが完全に自分のものになるまで音楽と合わ



せない。原作がある作品は本を読んだり、演劇を観たりして、自分なりの人物像を創り上げる。「その人物が台詞を語るときの気持ちや背景なども完全に自分のものになった段階で、初めて音楽に乗せると自然に表現できる」と彼女は語っていた。

アメリカでも成功

マリア・カラスの代役で大成功してから、イタリアではプリマドンナの地位に上りつめたものの、レッズジェーロ(軽い声質の歌手)のレッテルを貼られたような閉塞感があった。もともと生まれ持った声はリリコ(抒情的な声質)で、メゾの勉強をしたこともある。アジリタ(細かくコロコロと歌う)やレッズジェーロの声は習得したものだった。そうでなければ10歳代でのドラマティックな蝶々さんが歌えるはずがない。それなのにリリックな役がもらえないイタリアに見切



来日時の貴重なオフショット

スコット(右)とレナータ・ブルゾン(左)
© Reg Wilson / ROH

Renata Scott, Soprano, died at 89

りをつけて、1970年初頭に渡米を決意した。スカラ座のヴァイオリニストとの間に二人の子供をもうけていたが、夫もスカラ座を辞め、英語も話せないアメリカ移住だった。そうしてアメリカでも大成功を収め、マクベス夫人(ヴェルディ《マクベス》)や元帥夫人(R・シュトラウス《ばらの騎士》)、クンドリー(ワグナー《パルジファル》)まで歌えたのは、彼女の完璧な歌唱技術の成せるわざだ。その技術が弟子を通して生き残っていくことを願い、そして「冥福を祈りたい」。

スコットに寄せて

プラシド・ドミンゴ

(バリトン/テノール/指揮者)
Plácido Domingo

レナータ・スコットは世界のオペラ界が絶頂期を極めていた時代の主役だった。モンセラート・カヴァリエやミレッラ・フレニーニ、ジョーン・サザーランド、それからライラ・ゲンセトル、ピヴァリー・シルズ……そしてマリア・カラス、レナータ・テバルデイ、マグダ・オリヴェーロ等、すばらしいソプラノたちがきら星のように輝いていたなかを、彼女は上りつめたのです。

彼女の事は偉大な同僚として、そしてたぐいまれなるアーティストとして、私の心に永遠に残るでしょう。

彼女と分かち合った舞台はあまりにもすばらしく、いま思い出しただけでも感

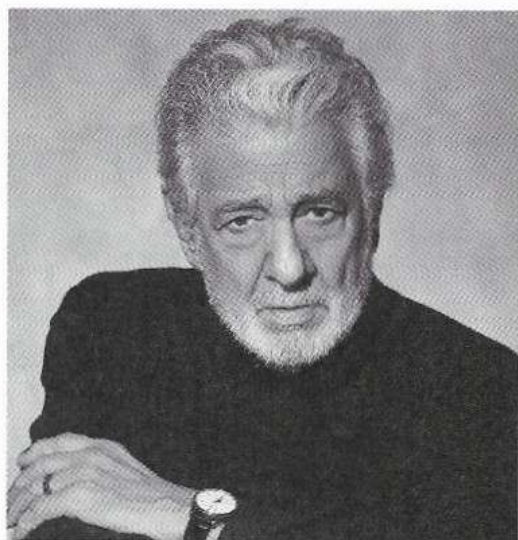
for Renata Scotto

動するほどで、とくにメトロポリタン歌劇場ではたくさん共演しました。私のように彼女と舞台を共にした者は、どの世代に属せようと彼女からすばらしい記憶を与えられました。彼女は多くの若いアーティストに私たちの仕事に対する愛情を伝えました。未来の世代は彼女の残した録音に聴き惚れることができるでしょう。レナータはオペラ史に残る1ページを刻んだのです。

レオ・ヌッチ (バリトン)
Leo Nucci

サンティが逝き、ミレッラ(フレニーニ)、そしてレナータまでいなくなりました。

僕のいちばん最初の録音は、レナータと歌った《妖精ウィツリ》(ブッチーニ)



スコット(左)とドミンゴ(右)は数多く共演し、多くの名演を繰り広げてきた



リゴレットを演じるヌッチ © Brenzoni

で、ロリン・マゼール指揮、プラシド・ドミンゴとティト・ゴツピもいた。それから《蝶々夫人》(ブッチーニ)や《ボエーム》(ブッチーニ)でも共演したので、レナータが《蝶々夫人》を演出したとき、主役は渡辺葉子で、シャープレスは僕を望んでくれたんだ。シカゴの《仮面舞踏会》(ヴェルディ)はルチアーノ・バヴァロツティも一緒だった。

スコットのすばらしさは表現方法で、真のアーティストだね。まず言葉、そして音楽的表現も。彼女は若くしてデビューして、エディンバラでマリア・カラスの代役を務めた。彼女の声の色は、とくにレヅジェーロの部分は、勉強の末に習得したんだ。彼女はよい人で、よい友達だった。私は近くにいたのに、最後は独りで亡くなったらしい。お嬢さんから電話があった。お葬式も近親者のみで行われたらしい。

彼女は家族中が推して歌手への道を進んだからかな、生涯『歌い手』だった。会ってもいつも歌の話ばかりしていたね。

ロバート・ロンバルド (スコットのマネージャー)
Robert Lombardo

イタリア留学中の1962年、スカラ座

で《リゴレット》(ヴェルディ)を観たのがレナータとの出会いでした。その声と知性に惹かれ、サインをもらいました。アメリカに帰国後、1965年にスコットが《蝶々夫人》(ブッチーニ)でメトロポリタン歌劇場にデビューしたのです。彼女はみなを泣かせ、大勢が会場から彼女が出てくるのを待っていました。そこでミラノの話をすると、覚えていてくれて、追っかけをしていくうち、文通するまでになりました。レナータが契約するときは通訳していた流れで、大銀行の弁護士を辞めてスコットのエージェントになったのです。

レナータは息に乗ったレガートと完全なコントロール力と知性、音楽的勘のよさと、問題を解決する勘も持っていました。ジェイムズ・レヴァインとも知り合っ

てすぐに友情が生まれました。

レナータ・スコット Renata Scotto
1934年生まれ、イタリア・サヴォナ出身。1952年、ミラノのテアトロ・ヌオーヴォで、ヴェルディ《椿姫》のヴィオレッタでデビュー。1957年、エディンバラのスカラ座公演でベッリーニ《夢遊病の女》をマリア・カラスの代役で歌って成功。以後、世界的なソプラノ歌手として活躍。1990年代に入って、R.シュトラウス《ばらの騎士》元帥夫人、ワーグナー《ワルジファル》クンドリーなど、イタリア・オペラ以外のレパートリーにも積極的に取り組んだ。2002年にオペラから引退、その後は、後進の指導やコンクールの審査員、演出家などを務めた。2023年8月16日、サヴォナで死去。享年89。

